

第四十節の秘められた歴史 — 第七番

十一と二十二

Jeff Pippenger

2026-04-04

ダニエル書第十一章十六節と二十二節はいずれも、間もなく到来する日曜法と符合している。十節の成就是一九八九年において、二〇一四年のウクライナ戦争へと導いたが、それは紀元前二一七年における十一節のラフィアの戦いの成就是によって表象されている。十一節から十六節までは、同時に十一節から二十二節までもある。したがって、十一節から十六節において表象されている四十節の隠された歴史は、同様に十一節から二十二節の歴史としても表象されている。四十節の隠された歴史は、十一節から二十二節によって表象されている。

第十一章から第二十二章まで

その隠された歴史は、創世記、マタイ、黙示録、および『各時代の希望』の十一章から第二十二章にも表されている。これら「十一章から第二十二章」なる四人の証人は、その隠された歴史と一致している。なぜなら、その隠された歴史とは、ダニエル書十一章における十一節から二十二節だからである。四人の証人の中心は、常に契約のしるしを示している。それは、創世記十一章においてニムロデによって表される死の契約に始まり、黙示録十七章におけるローマの淫婦に至って終わる。

十七

マタイを例外として、四人の証人は、それぞれが例証する期間の中間点として第十七章を特定している。十七という数は、紀元前457年、64年、および1776年に始まった三つの二百五十年の預言の中にも、それぞれ三度見いだされる。それらの系統のうち二つ、すなわち最初と最後は、中間点を示しており、最初の紀元前457年の系統は紀元前207年に終わり、最後の1776年の系統は2026年に終わる。紀元前207年はラフィアの戦いとパニウムの戦いの間にあり、2026年はアメリカ合衆国最後の大統領の任期中間に当たる。

三つの二百五十年の系譜のうちにおいて、プトレマイオスは十七年間統治した。ネロの系譜においては、313年から330年までの間に十七年があり、また紀元前217年のラフィアの戦いから紀元前200年のパニウムの戦いまでの間にも十七年があった。第十一章から第二十二章に至る諸章の四つの証人のうち三つは、その正確な中間点を第十七章として示している。したがって、第四十節の隠された歴史は、同じ章の第十一節から第二十二節において表されており、第十一章から第二十二章までの四つの証人は、まさにそれら同じ節と一致している。三つの二百五十年の預言のそれぞれの成就是、まったく同一の歴史と一致している。中間点は道標として強調されており、とりわけそれは神の民の契約と印の象徴として特定されている。

ダニエル書 第十二章

ダニエル書第十二章の七節、十一節および十二節は、十四万四千人の封印の最終期間を特定している。七節は2023年12月31日を特定し、十二節は2020年7月18日を特定している。2020年7月18日に始まり、2023年12月31日に終わった七節の散らしは、ダニエル書第十二章に置かれている預言的時を示す三つの節のアルファとオメガにおいて表象されていた。千二百九十年の中央の節は、1989年から間もなく到来する日曜法までの歴史を30として、次いで千二百六十を人類の恩恵期間の終了までとして特定している。三十年は十四万四千人の祭司職の年齢を表し、また千二百六十年は黙示録十三章の象徴的な四十二か月を予表している。

三十年に続いて千二百六十年に及ぶ二重の預言は、アブラハムとパウロの四百年および四百三十年という二重の契約の預言の象徴である。ダニエル書十二章における三つの節の中間点は、第十三の文字の反逆を表すと同時に、十四万四千人の契約と封印をも強調している。この三つの節はまた隠された歴史とも一致しており、中間点が契約の象徴であることの強調に、もう一つの証しを加えている。

春と秋

これらすべての線に加えて、レビ記二十三章に位置づけられている春と秋の祭りの三つの証人を、十字架の歴史におけるペンテコステの季節と整列させ、かつ結び合わせなければならない。そこでは章は二十三章であり、それはキリストの贖罪の御業の象徴である。その章は四十四節から成っており、象徴的に一八四四年十月二十二日を表している。十月二十二日は、十月における二十二日間、すなわち第一日から始まり第二十二日に終わる日数を表し、したがってヘブライ語アルファベットの資格証明を帯びている。十月は第十の月であるため、これに第二十二日を掛けると二百二十となる。

ヘブライ暦において、第七の月の第十日は贖罪の日であり、また十に七を掛けると七十となるが、これは恩恵期間を象徴する。二千三百年は1844年に終わったが、その時、第三の天使が到来したのであり、それはその期間を開始した第三の布告によって予型されていた。そのとき、二千三百日の初めに、古代の文字どおりのイスラエルに割り当てられた恩恵期間として七十週が定められていた。そしてそれらの日の終わりにおいては、現代の霊的イスラエルのための恩恵期間が、第七の月の第十日より表されており、それは七十に相当する。1844年10月22日は、ほどなく到来する日曜法を予型しており、またそこにおいて、第七日再臨主義のための象徴的な七十年の恩恵期間が終わるのである。それは、ステパノが石打ちにされた時にユダヤ人に対してそうであったのと同様である。

1844年は、二人の御使いが到来した期間を表しており、第二の御使いは最初の失望の時に、第三の御使いは大いなる失望の時に到来した。「44」は、ダニエル書11章44節の東と北からの知らせによって表される、二重の使命を表している。レビ記23章は四十四節から成り、聖なる祭りを春と秋とに分けている。その四十四節は、二重の使命を表している。二つの季節はそれぞれ二十二節ずつによって表されているので、春の祭りも秋の祭りも、ともにヘブライ暦の二十二の文字を表している。二十二節から成るそれら二人の証人が、ペンテコステの季節とともに一つにまとめられるとき、それらは三段階の枠組みを生み出す。

第一の道標は三つの部分から成り、その後五日が続くが、それは三つの道標の最後のものも同様である。中央の道標は、勝利の教会において奉仕する祭司として油注がれつつある者たちに対する、キリストによる三十日にわたる対面の教えである。レビ記二十三章は、四十節の隠された歴史と符合している。

中間点

創世記第十一章から第二十二章までの流れの中間点は第十七章であり、そこではアブラハムに対する三段階の契約の第二段階と、割礼のしるしとが制定された。第十一章から第二十二章に至るまでに置かれているすべての節のちょうど中心に当たるのは、創世記17:22である。

しかし、わたしの契約は、来年のこの定められた時にサラがあなたに産むイサクと立てる。」神はアブラハムと語ることを終え、彼のもとから上って行かれた。創世記 17:22.

神は第一節においてアブラハムに語り始め、第二十二節においてその対話を終えられた。ゆえに、割礼の契約に関するこの全対話は、ヘブライ語アルファベット二十二文字の預言的文脈の内に置かれていたのであり、しかもその二十二節の主題は、第八日に執り行われるべき割礼の儀式であった。創世記のこの箇所を中心、すなわち中点は、アブラハムの割礼の契約によって表される十四万四千人との神の契約関係である。創世記の第十一章から第二十二章に至る章列の中点は第十七章であり、さらにその章の絶対的中点は、神がアブラハムとの契約についての対話を終えられる第二十二節である。こうしてその中点は、二十二文字から成るヘブライ語アルファベットの文脈の中に置かれるのである。そして、その二十二節の中点は、言うまでもなく第十一節である。

あなたがたは包皮の肉を割礼しなければならない。それは、わたしとあなたがたとの間の契約のしるしとなるであろう。創世記 17:11.

聖書の第十一章から第二十二章までの四つの区分における各区分の中点は、その中点の思想を完結させるために三つの節を含んでいる。

これが、わたしとあなた、またあなたの後の子孫との間で、あなたがたの守るべきわたしの契約である。あなたがたのうちの男子は皆、割礼を受けなければならない。あなたがたは包皮の肉を切り取らなければならない。それが、わたしとあなたがたとの間の契約のしるしとなる。あなたがたの代々にわたって、生まれて八日目の男子は皆、割礼を受けなければならない。家に生まれた者も、またあなたの子孫ではない異国人から金で買い取られた者も、皆そうである。創世記 17:10-12

しるしとは、旗じるしを表す徴である。この箇所は、その旗じるしである十四万四千人について述べている。男の子は生後八日目に割礼を受けることになっていたが、それはちょうど、ノアの契約が箱舟の中の八人の魂と共にあったのと同様であり、こうして「八」という数を用いて、ノア契約とアブラハム契約とを結び付けているのである。彼らはフィラデルフィヤの者たるべきである。というのも、彼らは割礼を受けるべきであり、その割礼をパウロは肉の十字架刑の象徴であると示しているからである。肉が十字架につけられるとき、キリストの神性が内に宿り、その結合こそが旗じるしである。なぜなら、ホワイ

ト姉妹が「キリストの御品性はその子らのうちに完全に再現されるとき、主は彼らを迎えるために来られる」と述べているとおりである。

「人間の本性は墮落しており、聖なる神によって義しく罪に定められている。しかし、悔い改める罪人のために備えがなされているのであって、神のひとり子の贖いを信仰によって受け入れることにより、その人は罪の赦しを受け、義と認められ、天の家族の一員として子とされ、神の国の相続人となることができる。品性の変化は聖霊の働きによって成し遂げられるのであり、聖霊は人間に働きかけ、それがなされることを願い、これに同意するその人のうちに、新しい性質を植えつけられる。こうして神のかたちはその魂に回復され、日ごとに恵みによって強められ、新たにされ、義と真の聖さにおいて、ますます完全にキリストのご品性を反映することができるようになる。」

愚かな乙女たちとして表されている者たちにとって切実に必要な油は、外側に塗るべき何ものかではない。彼らは真理を魂の聖所の中に携え入れ、それによって清められ、精錬され、聖別されなければならない。彼らに必要なのは理論ではない。必要なのは聖書の神聖な教えである。それは不確かで、ばらばらな教理ではなく、キリストを中心として永遠の利害にかかわる生ける真理である。神の真理の完全な体系はキリストのうちにある。キリストへの信仰による魂の救いこそ、真理の土台であり柱である。キリストに対する真実の信仰を働かせる者たちは、それを品性の聖潔によって、また神の律法への従順によって明らかにする。彼らは、イエスにあるままの真理が天にまで達し、永遠を包み込むことを悟る。彼らは、キリスト者の品性がキリストのご品性を表し、恵みと真理とに満ちていなければならないことを理解する。彼らには、尽きることのない光を保つ恵みの油が授けられる。信者の心の中におられる聖霊は、その人をキリストにあって完全な者とする。人が激しい感情を高ぶらせるような状況のもとで深い感情を示すからといって、その人がクリスチャンであることの決定的な証拠とはならない。キリストに似た者は、その魂のうちに深く、確固として、忍耐強い要素を有しているが、それでいて自らの弱さを自覚しており、悪魔に欺かれ、惑わされて自己を信頼するようになることはない。その人は神の御言葉についての知識を有し、ただイエス・キリストの御手に自分の手を置き、堅く主を握っているときにのみ自分が安全であることを知っている。

「品性は危機によって明らかにされる。真夜中に、『見よ、花婿が来る。彼を迎えに出よ』と真剣な声が告げ知らせたとき、眠っていたおとめたちは眠りから起こされ、その出来事に備えをしていたのがだれであるかが明らかになった。双方とも不意を突かれたが、一方は非常事態に備えており、他方は備えのないままであることが判明した。品性は状況によって明らかにされる。非常時は品性の真の質を現す。何らかの突然の、予期しなかった災難、死別、または危機、何らかの思いがけない病や苦悩、魂を死と直面させるようなものは、品性の内なる真実を明らかにする。神の御言葉の約束に対する真の信仰があるか否かが明白にされる。魂が恵みによって支えられているかどうか、ともしびを入れた器に油があるかどうか、明らかにされる。」

「試みの時はすべての者に臨む。神の試験と証明の下にあって、私たちはどのようにふるまうであろうか。私たちのともしびは消えるであろうか。それともなお燃え続けているであろうか。恵みとまこととに満ちておられるお方との結びつきによって、私た

ちはあらゆる非常事態に備えているであろうか。五人の賢い処女は、その品性を五人の愚かな処女に分け与えることはできなかつた。品性は、私たち一人ひとりが自ら形成しなければならない。それは、たとえその所有者が喜んでその犠牲を払おうとしても、他の人に移し与えることはできない。憐れみがなおとどまっている間に、私たちが互いのためになし得ることは多い。私たちはキリストの品性をあらわすことができる。過ちを犯している者に忠実な警告を与えることができる。私たちは、あらゆる寛容と教えとをもって戒め、責め、懲らしめ、聖なるみ言葉の教理を心にまで届かせることができる。心からの同情を示すことができる。互いに共に祈り、また互いのために祈ることができる。慎み深い生活を送り、聖なる言葉と行いを保つことによって、私たちはクリスチャンがいかなるものであるべきかの模範を示すことができる。しかし、だれ一人として、自分自身の品性の型を他の人に与えることはできない。私たちが救われるのは集団としてではなく、個人としてであるという事実を、よく考えようではないか。私たちは、自ら形成した品性に従って裁かれるのである。魂を永遠のために備えることを怠り、死の床に臨むまで神との和解を先延ばしにすることは危険である。私たちが永遠の運命を定めるのは、日々の生活の営みと、その中であらわす霊によってである。最も小さなことに忠実な者は、多くのことにも忠実である。もし私たちがキリストを自らの模範とし、主がご自身の生涯において示してくださった実例のとおり歩み、働いてきたのであれば、私たちは自らの経験に臨む厳粛な不意の出来事に対しても備えることができ、心から『わたしの思いではなく、みこころのままになさってください』と言うことができるのである。」

「今われわれが生きているこの恩恵期間においてこそ、われわれは静かに救いの条件を熟考し、神の御言葉に定められた条件に従って生きるべきである。われわれは細心の訓練による規律をもって、時ごとと日ごとに、あらゆる義務を果たすことができるよう、自らを教育し鍛錬しなければならない。われわれは神、そして神が遣わされたイエス・キリストを知る者とならなければならない。あらゆる試練の中にあつて、われわれには、『わたしの力にすぎるがよい。そうすれば、わたしと和らぎを得ることができる。まことに、わたしと和らぎを得ることができる』と言われたお方に拠り頼む特権が与えられている。主は、親が自分の子どもにパンを与えようとする以上に、われわれに聖霊を与えようとしておられるのである。それゆえ、われわれのともしびとともに器の中に恵みの油を備えようではないか。そうすれば、花婿を迎えに出る備えができておらず、愚かな処女たちとして表された者たちの中に見いだされることはないであろう。」『Review and Herald』、1895年9月17日。

アブラハムの割礼と箱舟の上の八つの魂によって予表された十四万四千人の旗印は、まもなく到来する危機においてキリストのご品性を完全に反映する、たとえの中の賢いおとめたちである。姉妹ホワイトがその一節をイザヤ書の引用をもって締めくくったのは、まことにふさわしいことであつた。というのは、それは十四万四千人の印を押される時に直接言及している箇所だからである。

その日には、彼女について歌え、ぶどう酒の赤きぶどう畑よ、と。わたしは主、これを守る。絶えずこれに水を注ぎ、これを損なう者のないように、夜も昼もこれを守る。憤りはわたしのうちにない。いばらとおどろを、だれかわたしに向かって戦いに備えさせる者があるなら、わたしはそれらの中を進み、それらをことごとく焼き尽くすであろう。あるいは、わたしの力にすぎた、わたしと和睦をなすがよい。そうすれば、

彼はわたしと和睦をなすであろう。ヤコブから出る者たちは根を張り、イスラエルは花を咲かせ、芽を出し、その実をもって世界の面を満たすであろう。主は、彼を撃った者たちを撃ったように、彼を撃たれたであろうか。あるいは、彼によって殺された者たちの殺戮のように、彼は殺されたであろうか。あなたは、これが伸び出るとき、量りをもってこれをさばかれる。主は東風の日、その荒々しい風をとどめられる。それゆえ、これによってヤコブの不義は贖われる。これが彼の罪を除き去ることのすべての実である。すなわち、彼が祭壇のすべての石を砕かれた白亜の石のようにし、アシェラ像と香の祭壇とを立たせないときである。しかし、堅固な町は荒れすたれ、住まいは見捨てられ、荒野のように放置される。そこでは子牛が草を食み、そこに伏し、その枝を食い尽くす。その枝が枯れると、それは折り取られる。女たちが来て、それを火にくべる。これは悟りのない民だからである。それゆえ、彼らを造った方は彼らをあわれまず、彼らを形造った方は彼らに恵みを示されない。イザヤ書 27:2-11。

「東風の日」において、すなわちヤコブの不義が除き清められ、もう一つの「悟りのない民」の群れが集められて焼かれているその時こそ、十四万四千人の印が押される時である。その期間にあっては、キリストと和を講じることを望む者はそうすることができるが、最後の動きは急速である。

祭司たちは奉仕を始めるとき三十歳でなければならず、十四万四千人は、終わりの日に神との契約を更新する、ペテロのいう王なる祭司たちである。

あなたがたもまた、生ける石として、霊の家に築き上げられ、聖なる祭司職とされ、それは、イエス・キリストによって神に受け入れられる霊のいけにえをささげるためである。ペテロ第一 1:5

祭司たちは八日間にわたる油注ぎの奉仕に仕えるよう整えられていた。したがって、数字の八は、箱の内にある油注がれた祭司職の象徴である。

アロンの杖

十四万四千人の油注がれた祭司職は、契約の箱の中にある芽を出したアロンの杖によって表されている。アロンの杖が芽を出したとき、それは、芽を出さなかったイスラエルの諸部族の他の杖とアロンとを区別するしるしとなった。聖書において、植物の芽生えを生じさせるのは雨である。

すべての預言者は終わりの日々について語っているので、アロンの祭司職の杖は、カルメル山におけるエリヤ、および1844年のミラー派と符合する状況における十四万四千人の油注ぎを象徴している。それは、後の雨の真のメッセージと偽りのメッセージとの間に明確な区別がなされる時点を扱っている。その区別は、ヨエルが「新しいぶどう酒」が一つの階級から断たれると示すときになされる。その新しいぶどう酒がその口から断たれる階級とは、イザヤの語るエフライムの酔いどれたちである。彼らはまた、ペンテコステの際に弟子たちを酔っていると非難した者たちであり、さらに1888年の反逆者たちでもあって、彼らは1863年の反逆者であった自分たちの父祖に従ったのである。これらすべての預言の線は、シスター・ホワイトが、世がアドベンチズムはナッシュビルの火の玉についておよそ百二十五年にわたって知りながら何も語らなかったことを悟る時に起こるものとして特定している線と一致している。

8、八十と81

三十という数と八という数は、後の時代の旗印である十四万四千人の祭司職の象徴であり、それは神性と人性の結合を表している。八という数は八十という数の十分の一であり、八十は、大祭司とともに聖所で香をささげようとしたウジヤ王に立ち向かった八十人の勇敢な祭司たちの数である。八十一は、勝利した教会の祭司職という文脈において、神性が人性と結合したことを表している。ウジヤの反逆の歴史は、その八十一の祭司職を、ラフィアの戦いの直後におけるプトレマイオスの反逆と一致する、まさにその危機に結びつけている。すべての預言者は後の時代を特定しているので、神性と人性が結合した祭司職、すなわち八十人の人間の祭司と一人の神的な大祭司とによって構成される勝利した教会の祭司職は、ウクライナ戦争が始まった2014年に開始された歴史の中に特定されている。

創世記の十二章から成る一連の中間の章は、第十七章である。その十二章の一連における中間の節は、第二十二節である。第二十二節は、第一節に始まる神とアブラハムとの対話の明確な終結を示しており、したがって第二十二節は、ヘブライ語アルファベット二十二文字の刻印を帯びる預言的な一連の終わりを示すものとして特定される。第二十二節から成るその一連の中間の節は第十一節であり、それはさらに、十四万四千人の旗印を示す三つの節の中間に当たる。ゆえに第十一節は三つの明確な節の中間であり、また第十一節は、その第二十二節のみならず、それがその内に含まれる三つの節の主要な真理を伝えている。こうして、第十一節と第二十二節は主要思想の始まりと終わりとして特定される。したがって、第十七章の第十一節から第二十二節までは、第十一章から第二十二章までの主要主題である。

マタイによる福音書の第十一章から第二十二章までの中間は、第十六章である。

そこでイエスは、弟子たちに、ご自身がイエス・キリストであることをだれにも告げてはならない、と厳しく命じられた。マタイ 16:20。

創世記の中間点の場合と同様に、第二十節は、キリストと弟子たちがカイサリア・ピリピに到着した第十三節に始まった特定の対話の終結を示している。

さて、イエスはカイサリヤ・ピリピの地方に来られたとき、弟子たちに尋ねて言われた。「人々は人の子であるわたしをだれであると言っているか。」彼らは言った。「ある人々はバプテスマのヨハネ、ほかの人々はエリヤ、またほかの人々はエレミヤ、あるいは預言者のひとりだと言っています。」イエスは彼らに言われた。「では、あなたがたはわたしをだれであると言うのか。」するとシモン・ペテロが答えて言った。「あなたはキリスト、生ける神の御子です。」するとイエスは彼に答えて言われた。「あなたは幸いである、シモン・バルヨナ。なぜなら、このことをあなたに明らかにしたのは血肉ではなく、天にいますわたしの父だからである。わたしもまたあなたに言う。あなたはペテロである。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。そして、陰府の門もこれに打ち勝つことはない。わたしはあなたに天の御国の鍵を与える。あなたが地上でつなぐことは何でも天においてもつなぐれ、あなたが地上で解くことは何でも天においても解かれる。」それからイエスは、ご自分がキリストであることをだれにも告げてはならない、と弟子たちに厳しく命じられた。マタイ 16:13-20。

ラフィアとパニウム

マタイの中間の箇所は、明確に別個の対話と主題を表しているだけでなく、創世記の証言における契約の象徴性がラフィアの戦いと一致しているのと同様に、マタイの対話はパニウム、すなわちカイサリア・ピリピで行われている。ダニエル書十一章十五節のパニウムは、マタイの十二章から成る線の中点であり、またダニエル書十一章十一節のラフィアは、創世記の十二章から成る線の中点である。

紀元前457年に始まった250年は紀元前207年に終結し、それは第十一節のラフィアと第十五節のパニウムとの中間点であり、そこにおいてアブラハムの割礼のしるしと、メシアについてのペテロの告白とが合流する。マタイ書の系統において、ペテロは、キリスト、すなわち神の御子とそのバプテスマにおいて現されたことを自ら認識したことを証言している。

シモンは「聞く者」を意味し、バルヨナは「鳩の子」を意味する。シモンは、聖霊が鳩の形をとって降ったとき、キリストのバプテスマのメッセージを聞いた者であった。キリストのバプテスマは、黙示録十章の力強い御使いが降った1840年8月11日を予表していた。同じ御使いが9/11に降った。ペテロは、9/11を十四万四千人の世代に対する試みのメッセージとして認識する者たちを表している。

ペテロは、行に次ぐ行という方法論を用いる者たちを表している。彼は鳩の「子」であるので、子として象徴的に最後の世代を表している。ペテロは最後の世代の象徴であり、彼の名の象徴的な数え方によって十四万四千人を表している。ペテロは、キリストが預言の線において現れるとき、力を授けることに関するメッセージを聞く最後の世代を表している。ペテロはキリストのバプテスマに結びついたメッセージを認識し、それゆえ、イエスを油注がれた者として、すなわちヘブライ語ではメシア、ギリシア語ではキリストとして見分けることができた。ペテロは、9/11に降った黙示録18章の天使が、1840年8月11日にもまた降っていたことを理解する者たちを表している。ペテロは、9/11を、二つまたは三つの線の証言によってのみ確立される道標として理解する者たちを表している。

ペテロの告白とは、9・11が第三の災いの到来を示しており、それが最後の世代に対する試験のメッセージである、ということである。その告白の場において、名が変えられる。アブラハムはラフィアにおり、ペテロは十字架の直前、パニウムにいる。パニウムと十字架との間で、ペテロは変貌の山を訪れることになる。シモンがその世代に対する試験のメッセージについての告白を語ったとき、パニウムにおいてシモンはペテロへと変えられるのである。十四万四千人にとって、その試験のメッセージとは、預言の歴史において9・11に到来した第三の災いとしてのイスラムである。

アドベンチズムに対する試験の始まりは9/11に始まり、アドベンチズムに対する試験の終わりに関して、第三の禍いのイスラムのメッセージは、シモンの名がいつ、どこで変えられるかを特定する。初めにおいて9/11のメッセージによって予表されていた、終わりにペテロが理解するメッセージは、ナッシュビル火の玉に関する訂正されたメッセージである。そこにおいて、ラッパの祭りが、旗の掲揚および贖罪の日の閉ざされた戸と相伴って到来する。

これらの事柄については、次の記事で引き続き取り上げる.